

特集

きつおん 吃音 人の数だけ対処法がある

話す時に言葉が詰まる吃音症。様々な要因が絡み合い、現在でも原因や治療法は確立されていない。吃音症は100人に1人いるとされ、全人口の1%を占める。そんな吃音に対して近年関心が高まりつつある。今回は、吃音に対して研究や思いを綴っている方々に取材し、非当事者は当事者とうき合うか、お話を聞くことができた。

11月24日、草津フェリエで「第3回吃音の集い」が行われた。講師に金沢大学の小林宏明教授を迎え、子どもと吃音のテーマのもと講演が行われた。講演では、子どもたちがどのような場面で吃音の症状が起きるか、小・中・高と分けながら話が進められた。

2019年より滋賀言友会で講演を実施。今回で3度目となる。吃音の認知は近年報道などにより高まっているが理解にはまだまだ時間を要す現状だ。また、法整備は進んでおり、残りの課題は学校等での指導など環境整備であると話す。

小林教授も吃音の当事者だ。小学校時代から吃音があり、当時は現在のように言葉の教室ではなく、苦労したと話す。

小林教授の研究によれば、吃音は心理的に自分の声に注目していることからなるもの。歌う際に吃音が出るのは諸説あるが、音楽はテンポが与えられているためテンポが言葉の出るタイミングを助けているのとだ。

当事者は、非当事者に向けて吃音がどのようなものか知ってもらうことが重要だ。どのようなものか分かれば、多くの人は理解し、助けてくれる。状況や伝えたい内容は、相手によって様々だ。そのため、正解はない。また、非当事者は当事者の要望をすべて受け入れる必要はない。機械的に当てるのではなく、当事者一人一人の状況に応じた対応を考えている必要がある。



↑子どもの吃音について講演される小林宏明教授

グループトーク 当事者・非当事者様々な立場が集う ゆっくり話して吃音を治した人 認知度拡大にはエンタメ要素が効果的か

講演後、グループトークが行われ、当事者やその関係者らが吃音について語りあった。

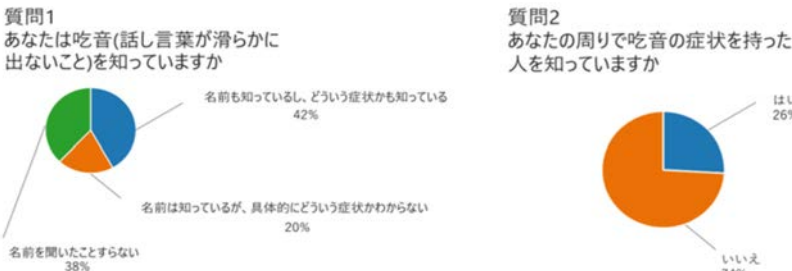
県内で小・中学校で通級指導教室(比較的軽度の障がいを持つ子ども)が個別の指導を受ける教室のことは、担当教員は小学校低学年の内に今日の講演のよう話を子ども達にするべきだと話す。学年が上がるにつれ語学が堪能になると言い換えを用いるため、先生が吃音の存在に気付かない恐れがある。吃音を自力で治した人もいる。京都府在住の男性は、現在ほとんど吃音の症状が



こばやしひろあき
小林宏明さん
金沢大学
人間社会研究域
学校教育系 教授
言語・コミュニケーション障がいがある子どもに関する研究を行う
石川言友会 会員

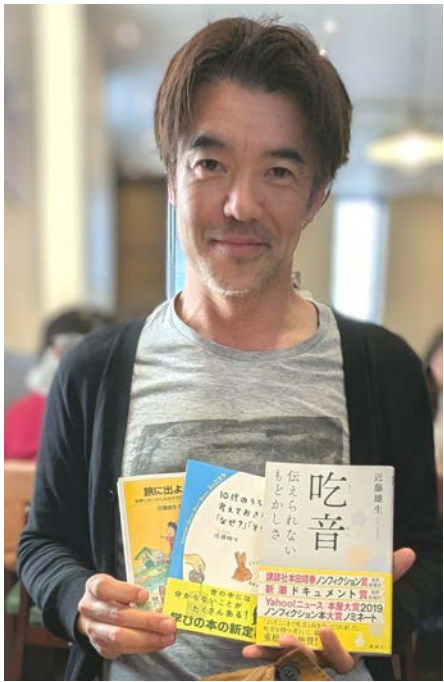
校内アンケート 62%が吃音を認知 周囲には当事者少

全校生徒及び全教職員を対象としたアンケートを実施。305名から回答を得られた。あなたは吃音を知っていますかの設問に対し42%が症状を理解。名前を聞いたことがあるに回答した人は20%と実に62%が認知していた。



適応できる場所に逃げるという選択肢

理系研究者志望から物書きを志した ライター 近藤 雄生さん



→出版した本とともに、近藤さん

「吃音を治して社会に適応するよりも、吃音があってもそのままの自分で生きやすい場所を置いていた方がよい」と思った。こう話すのは、フリーライターの近藤雄生さん。2016年に吃音の当事者の現実に迫った『吃音』を出版している。

自身の吃音をきっかけに2003年から東南アジアをはじめ中国、ヨーロッパなど世界中を5年程旅をし、その間もライターとしてルポルタージュなどを執筆。この旅こそが近藤さんの中で自分が適応できる場所に身を置くことだった。旅の日々を経て、症状は大幅に軽減した。(現在も時々出るが)自身が吃音に気付いたのは高校時代。中学までは、症状がなかったという。症状は比較的軽かったため、当初は人に気付かれることもなく、隠したりもできた。

高校以来、吃音を気にするようになり、あらゆる場面でいつ症状が出るか怖くなり、さらに悪化していった。

吃音は個性だという言い方があるが、「当事者自身が思う分には良いが、周囲が言うところには困っている人が助けを求められなくなる」と話す。個性と表したとして、それが日常生活で様々な不都合が出ると思えば、一般的な個性とは異なってくる。

当事者に対して、非当事者が吃音を受け入れた方がよいのか、治す道を探った方がよいのか。これによって大学時代に、人に会うことさえも嫌うようになる。東京大学で航空宇宙工学専攻だった近藤さん。大学時代は研究者や宇宙飛行士の道を志す。しかし、吃音があることを理由に断念。「宇宙飛行士とかは緊張して話せなくなったらそれはそれで問題だから」と話す。

吃音は一言では表せないほどパターンは様々だ。また、人によって症状の重さも異なる。一言話すだけでも苦しむ人。時々吃音の症状が出る人。実に多種多様だ。

「吃音は個性だ」という言い方があるが、「当事者自身が思う分には良いが、周囲が言うところには困っている人が助けを求められなくなる」と話す。個性と表したとして、それが日常生活で様々な不都合が出ると思えば、一般的な個性とは異なってくる。

当事者に対して、非当事者が吃音を受け入れた方がよいのか、治す道を探った方がよいのか。これによって大学時代に、人に会うことさえも嫌うようになる。東京大学で航空宇宙工学専攻だった近藤さん。大学時代は研究者や宇宙飛行士の道を志す。しかし、吃音があることを理由に断念。「宇宙飛行士とかは緊張して話せなくなったらそれはそれで問題だから」と話す。

吃音は一言では表せないほどパターンは様々だ。また、人によって症状の重さも異なる。一言話すだけでも苦しむ人。時々吃音の症状が出る人。実に多種多様だ。

吃音は症状も人によって様々 見えない苦しみをもっと知って

のか判断するのは難しく、最終的な判断は本人次第。「マニキュアルのよう」にこうすれば良いという。先回りした方が良いのかどうかはケースバイケース。そのためには、非当事者は、理解しようとする気持ち。また、当事者は簡単に理解してもらえないと過信しないこと。これが大事なのではないかと語る。

吃音がありながらも人前に出て活動している人は比較的。症状が重くない人が多い。その陰で人前に出てこれない症状の重い人をどうするか。まだまだ課題は多く残る。

「吃音は、得意不得意みたいなもの。話すことは、ある意味誰もができると思っている。社会の仕組みもそう。前提でなっているから、吃音を理由に社会から逃げることは悪いことではない。自分の生きやすい道がそのうち見えてくる。吃音があっても楽に生きられる道を探して生きていける」と最後にメッセージをくれた。

かつては、メディアで取り上げられることも少なく、気持ちの問題と言われていた吃音。これから先の世の中、「理解する」から「行動する」へ。当事者・非当事者がそれぞれ何を求めているか入念に知る必要があると、近藤さん(藤)